

気ままに ブックトーク！

#2 「夏目漱石『こころ』」



第1回に参加された方のリクエストに応じて、第2回は夏目漱石『こころ』を読みました。

『こころ』は1914年4月から朝日新聞に連載されました(110回)。「先生と私」「両親と私」「先生と遺書」の三部構成。

漱石自身の思い出も強く、単行本化するときに、かなり細かなところまで装丁を考案し指示していたそうです。



初めて読んだ人もいれば、漱石が好きで何度も読んでいる人も。特におもしろかったこと、印象に残った場面、読みながら感じたことなどを話しあいました。

男性と女性とはでは先生をどういう人物として考えるのかが違ったり。友人のKを自殺させてしまったという心の葛藤を、先生はなぜ長くかかえてしまったのか。先生がいなくなった後、私はどう生きているのか……etc. 思い思いに感想や意見を交換しました。

漱石のほかのおすすめ小説、子規と俳句、手紙、漱石が生きていた時代情勢、漱石を題材にした小説を書いた伊集院静の作品についても、話がはずみました。

最後にひとことずつ感想を共有し、次回以降の相談をしました。各自のおすすめ本を紹介する、今回紹介された本を読んでも、読んだことがないジャンルの本に挑戦する、など、アイデアを出しあいました。



【参加者の感想・意見から】

- ・文章が今の日本語とちがって「重い」
- ・推理小説みたいなどころがある。ドラマチックで感情移入ができる
- ・図書館から借りて読んだが読みづらかったので、手元にある連載100周年を記念して新聞に再掲載されたものを読み直した。連載の方が読みやすい
- ・心の葛藤が哀しくて、明るいうちに読んだ
- ・高校の授業で取り上げていたので高校時代に読んだ時は「お嬢さん」の視点で読んだが、母になった今は「お嬢さんのお母さんの視点」で読んだ。男性視点にすごくイライラした
- ・先生は「私」を全幅的に信用できたからこそ、ようやく死を選べたのか。

次回はふれあいまつり、3月23日(日)11-14時

【内容：「わたしの本棚」自分が紹介したい本(マンガもOK!)を持ち寄り、おしゃべりしましょう!】

この時間帯なら、いつでも参加OK! 本を持ってきても(1冊でも)、持ってこなくてもOK!

図書室ひろばは、予約なし・参加費無料の、気軽にみなさんが集える場所です 事業をやってみたい方は、ぜひ岡上分館までお問い合わせください

